

〈追悼文〉琉球語と日本語

比嘉, 正範

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

28

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

1995-02-24

琉球語と日本語

比嘉正範

中本正智さんに私が会ったのは約20年前、法政大学沖縄文化研究所に中本さんの研究発表を聞きに行ったときであった。人の良さそうな学者で、同じ県の出身ということもあって、私はすぐ中本さんに親しみを感じた。中本さんと話しているうちに、私たちが高校の同窓生であること、そしてその高校で私が教えていた頃の生徒であったことなどがわかり、直接の教え子ではなかったが、私はさらに親近感を覚えた。その後、中本さんの方言研究に対する情熱を聞くにつけ読むにつけ、私の親近感はやがて尊敬の念に変わっていった。

私が中本さんに沖文研で会ったときには、中本さんはすでに方言研究の第一人者になっていた。しかし、それだけでは私の尊敬の念を勝ち得なかったと思う。私自身も社会言語学的な研究に携わってきたので、方言研究の動向にもある程度なじみがあった。私が方言学者としての中本さんに深い印象を受けたのは、中本さんがこれまでの学説や調査法などにこだわらず、『図説琉球語辞典』のような独創的な研究を進めていることであった。

日本語の系統論がまだ五里霧中にあるため、多くの方言学者は、日本語は孤立語であるという前提の下に国内の方言を調査してきた。しかし、本土方言に比べて、琉球方言には日本語に「似て非なる要素」が多過ぎるため、これまで単に言語学的な問題でなく社会的な問題も引き起こしている。沖縄県で話されている言葉は日本語の方言か姉妹語かという言語学的な論争は、第二次大戦後に沖縄がアメリカの統治下におかれたり、住民の日本復帰運動が起きたりしているうちに、いつの間にか立ち消えてしまった。沖縄の言葉は日本語の一方言である、と唱えたほうが社会的に受け入れられることになった。これは復帰前の沖縄を知る人にとっては当然の成り行きであった。

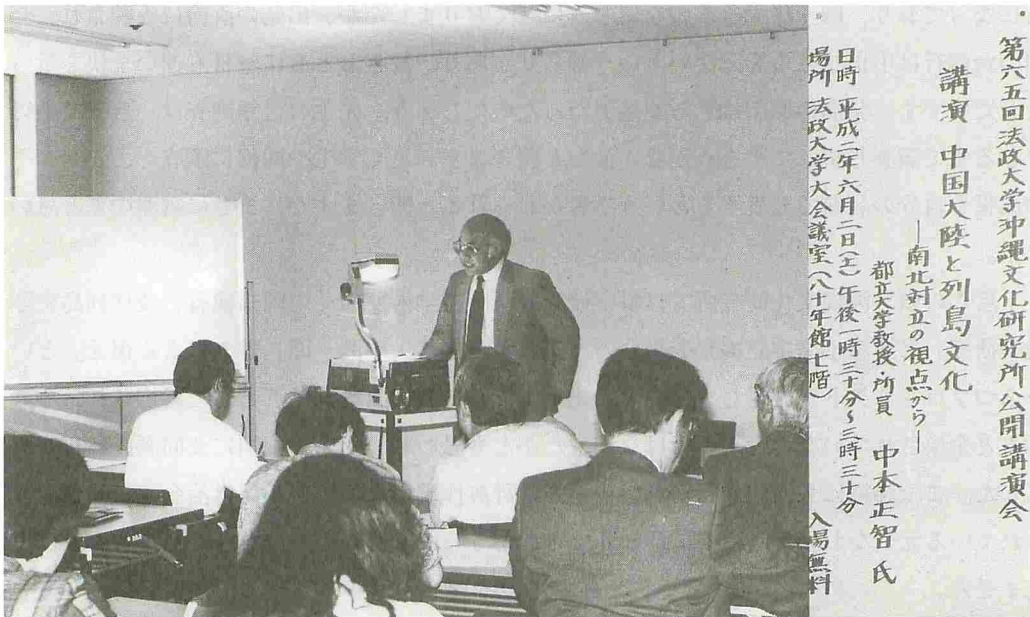
沖縄県は、明治5年に日本国の琉球藩になるまでは、小さいながらも琉球国という独立王国であった。そのため、琉球人は日本人かという論争もかつてはあった。しかし今では、日本人と琉球人は民族的起源が同一である、といういわゆる日琉同祖論が主流をしめている。この同祖論に沿った調査に基づいて、琉球語も現在の日本語も同じ祖語から分岐したと見なされ、言語としては琉球語対日本語、方言としては琉球方言対本土方言という分類が主流になっている。しかし、かつての琉球王国が沖縄県になっているため、現在では琉球語の代わりに沖縄語、そして琉球方言の代わりに沖縄方言という名称を使う研究者も多い。このような政治的にも心理的にも複雑な状況の下で、中本さんは誰にも何にも迎合せず、一貫して琉球語という名称を使い、奄美大島から与那国島にまたがって使われている琉球語の調査を通

して、日本語の研究に貢献してきた。

中本さんの琉球語の研究は単なる地方語あるいは地域方言の研究ではなく、視点を絶えず日本語の系統、中本さんのいう系譜、の解明に置いてきた。日本語はアジア大陸に広がったアジア古層語につながる言語である、というのが中本さんの持論であった。日本語がアジアの諸言語と少なくとも部分的につながるのは、このことが原因であると考えていた。中本さんはこの持論を実証するためにアジア言語地図を作る仕事を始めたばかりであった。もしこの仕事が成し遂げられていたら、日本語も琉球語もアジアの諸言語と同じようにアジア古層語から分岐した方言である、という結論が提示されていたかもしれない。

琉球語の研究に大きな進歩をもたらした中本さんは今ごろ、天国からアジア全体を見下ろしながら、アジア言語地図を作る時間がなかったことを残念がると同時に、若い言語学者たちが視野の広い、大胆な日本語の系統論を展開することを期待しているような気がする。

(龍谷大学教授)



法政大学沖縄文化研究所公開講演会風景